
プラス×マイナス

shibon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラス×マイナス

【Nコード】

N44410

【作者名】

shibon

【あらすじ】

誰もが憧れる？“超エリート学校”！頭もそれほど良くない主人公は突然届いていた“入学許可書”と一通の手紙を手にし、しぶしぶエリート学園に入学すること・・・しかし、そこは個性的な生徒達ばかりで、その中でも“西園寺 勇美”は 学園一のマイナス思考の持ち主、運悪くも主人公は“お知り合い”になってしまい・・・。

プロローグ く土下座く（前書き）

頑張って書きました。

拙い作品ですがこれから宜しく願いしますm┐┐┐m

プロローグ く土下座く

私立大双葉学園、今年から俺が通う学校の名前だ。

この学園は超エリートばかりが通う学園で、非常に個性的な生徒達が集まるといふ面でも有名だ。

・・・え？

実際俺は“超エリート”なのかって？

そんな馬鹿な。

俺が“超エリート”な訳が無い。

第一、この学園に入れるなんて微塵も思わなかったしな。

なんで俺がこの学園に来たか、俺自信にも“分からない”

朝起きたらポストの中には“入学許可書”、それと手紙が同封されていた。

手紙にはこう書いてあった。

どうだ？驚いたか？ん？・・・まあ、そういう事だ。

君には“私立大双葉学園”の生徒として今年から入学して貰う事にした。

勿論、私の独断だ。絶対に来い・・・という訳でも無い。

君の自由だ。

そう、君の自由なのだ。

この折角の“エリート”になれるチャンスを物にするか、みすみす見逃し、このまま負け犬の人生を歩んで行くのかは・・・。

全て君の“自由”なのだ。

それからもし、入学するのならば、この学園内では“姫川 瑛太”と名乗って貰う。

以上。

なんだこの手紙は、そもそも俺には“エリート”なんて興味無いし、なるうとも思わない。

ただ・・・。

“負け犬”

これには流石にムカついたね。なんなんだお前はと、何様なんだお前はと・・・そう思った訳だね。

まあ・・・来たんだけどさ・・・。つーかそんな事よりも・・・。

お前ら個性的過ぎるだろ。

なんか刀を常時装備してる奴、マントを羽織って来る奴、ゲームとかで良く出て来る魔術師のような格好で歩いて来る奴、拳げ句の果てにはを戦士の鎧を着て来る奴も居たほどだ。

此処は（頭が）ファンタジー学園か？

“制服着るよ”なんてあまっちよろい・・・。

ファンタジー学園にしてそっち路線で売り出した方が良いんじゃないか？と思う程の制服着てこない率がハンパなかった。

ああ・・・この可憐に咲いてる桜の木大先輩も「もう、俺の知っている日本じゃない」って呟いてるだろうぜ・・・。

とそんな事を考えながら歩いているので、近付いて来る足音にも気づかず。

ドンッ。

・・・ぶつかっただね。

俺がゴメンと謝ろうとすると、彼女がくると俺の方を向き

ひざまずき、手をついた。

「誠に申し訳ありませんでした」

土下座・・・。

それが彼女と俺の最初の出会いだった。

第一話 くマイナス彼女く（前書き）

いきなりヒロインの女の子が主人公に土下座するなんてなかなかありませぬよね……。

頑張って書いていきますので応援宜しくお願いしますm（）（）

m

第一話 くマイナス彼女く

おいおいマジかよ……。

彼女はただ、土下座していた。いや、させてるのか？

……どちらにしても。

「……おい、もう止めてくれって……」

土下座する彼女に必死に止めるように、懇願する俺……。
すごく異様な光景じゃないか？

……おいそのこのマントの奴……何、人の事を敵意の目で睨んでんだ……。
いやマントだけじゃない色んな奴から、“本当に色んな奴”から敵意の視線を感じる。

おいおい待ってくれよ……。

「私の不注意で……なんとお詫びして良いか……」
泣いている。泣かした訳じゃ無い。“勝手”に彼女が泣いているのだ。

更に俺に対する“色んな奴”からの敵意の視線が増えていく。しゃーないか……。本当に不本意だが……。

“土下座している彼女”の手を引つ張る。

「ちょっとこっちに来い・・・」

「え？・・・あの・・・」

逃げましたよ。

入学早々、学校中走り回りましたよ。

ただ人の目が怖くて、ただ自分が皆からどう映っているのかが気になって・・・そりゃもう真剣に走りましたよ・・・。

ただね。

土下座していた彼女をよく見ると結構お嬢様っぽくて断然、美少女に入るくらいのルックスの持ち主だった。ああ・・・こんな子と手を繋ぎながら校舎を回ってるなんて・・・なんてラッキーなんだろう・・・。

まあ、最悪な状態なのには変わりませんがね。

ちよつと現実逃避してみました。

あれ？ちよつと待てよ。

なんか急に重くなってるないか？

俺は後ろを見てみる。

案の定、彼女は引きずられていた。彼女には申し訳ないがすごく滑稽でした。

（10分後）

「本当にすみません・・・私の運動能力が低いせいで貴方の手を煩

わせてしまつて……」

「いや、良いよ別に」

「……わたしが普段から足を鍛えていたら……こんな事には……」

「いや、良いよ別に」

「いいえ……私が悪いのです……私の足がボルト並に速かつたら……」

「はあ……」

さつきからずつとこの調子だ。何も悪い事は起きて無いのに……強いて言うなら彼女を起こそうとした時に“腰をやっちゃった”……位の事です。

あまりの激痛に体を起こせない位の事ですから。

そして、未だに学校の外に居ること位の事ですから。

もう、始業鈴が鳴っている事位ですから……。

駄目だ。全然小さい事じゃ無いわ。

大事な入学初日に何をやっちゃった……とか言ってるんだ俺は、入学初日で遅刻して……やっちゃった……としか言え無いよもう……。

駄目だ。やっぱ言っちゃ駄目だわ。
そんな入学早々、学園人生の転機を迎える俺を尻目に彼女はずっと泣いていた。

「私は・・・本当に何やつても駄目で・・・」

「いやいや、こんな有名私立に通ってたから何か特技とか一つ位あるだろ？」

彼女は少し頬を赤く染め答えた。

「爆弾処理が得意です・・・」

「うん、もう世界に羽ばたけるね」

駄目のレベルがちげえ・・・。

遥かに俺を凌駕してやがる。

「そんな奴はやっぱりクラスも“特進コース”なのかねえ」

「“特別進学コース”の事ですか？・・・違いますよ」

え？

意外だ・・・意外過ぎる。

因みにこの学園は一般の“普通科”一般よりもデキる奴らを集めた“進学科”そして、エリート中のエリート・・・“特別進学コース”というものがある。

おれはその中では“進学科”に入る。
・・・まあ、普通よりもデキる奴って事だ。
まあ、実際そんな事ないんだけどね・・・。

「つーことは“進学科”か？」

「はい」

「もしかして・・・D組？」

「・・・はい、そうですか・・・」

俺は彼女の肩に両手を置いた。

「・・・初日で遅刻しても、二人なら怖くない」

「へ？」

俺は今、教室の扉の前に居る。彼女は俺の後ろから俺を見守ってくれている。

ガラリ・・・。

扉を開けるとなかなかの美人な女教師が立っていた。

「一応、理由は聞いておこうか・・・言え」

“お前なんていつでも殺せるんだぜ？”みたいな目で俺を睨みつける先生。

・・・でも大丈夫さ、あの“魔法の言葉”があれば・・・。
俺の後ろにはまるで神に縋るような目で俺を見ている“彼女”が居た。

まるで全部自分のせいだと言う“超マイナス思考彼女”

俺は意を決した。

「すみません先生、やっちゃいました」

この後、俺が先生によって血祭りにあげられたのはあまりに残酷な描写があつた為、敢えて語らないこととする。

第一話 くマイナス彼女く（後書き）

どうだったでしょうか？ここまで読んで下さった読者の皆様有難う
ございます。

これからも宜しくお願いします（＾o＾）／

第二話 〽中二の脅威編Part?〽 (前書き)

だいぶ、更新が遅れてしまいました・・・。

静かに待っていてくれる人はごめんなさいm | | m

今回はPartごとに分けました。

楽しんでいって下さいね！

第二話 〱中二の脅威編 Part 〱

入学早々、遅刻した俺は“不良野郎”というレッテルを勝手に貼られ、又は入学早々女に手を出した“糞野郎”として、その名を上げていた。

女というのは前に俺が学校中を走り回らせた女の子の事だ。(学校中を走り回る原因を作ったのは彼女だが・・・)
彼女は“西園寺 勇美”という名前らしい。

その勇美が俺の悪名を食い止めようと頑張ってくれているが、正直いってあまり期待はしていない。
なぜなら彼女は、

“超マイナス思考女”だからだ。

そんな事を思いながら教室の窓を見ていた。窓からは桜並木が見える絶好のポジションだ。それに、此処に居るお陰で先生の呪文のような数学の公式を言っていたとしても、軽く聞き流す事が出来た。
そんな一日だ。

・・・だが一つだけ気に入らない事がある。

なんで後ろの席が“マイナス思考女”なんだ？

「……ずっと聞こえてくる“マイナスな単語”……止まる事が無い。」

「ふふふ……私なんて、何も出来ない……ただの馬鹿な女なんですよ……存在しやいけなかつたんです……ああ無に還りたい……どうか私の存在を無に……」

ずっとこの調子だ。

……まあ、俺には関係無いし、また勉強に励もうと

「するわけねえだろうがああああ!!!」

突然、席を立ち上がる俺、回りの視線を感じるがそんなこと気にしてる場合ではなかった。

俺はくるりと体を半回転させ、彼女に一喝。

「お前は少しでも、マイナス思考を止められないのかああああああああ!!!」

彼女はキョトンとしていたが、やっと自分が怒られているのが分かり、瞳に涙が溜まり始める。

シクシク……。

一人泣きはじめる勇美。

「おい姫川・・・授業中にいきなり女の子を泣かせるとは・・・
どういっ了見だ？」

今授業していたのは、あの時の美人な女教師

「あ、先生居たんですか 全然気が付き」

この後俺が血祭りにあげられたのは、残酷なr y

「まったく・・・お前のせいでえらい目にあっただぜ・・・」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

あの後、俺は彼女の付き添いで保健室まで来ていた。

美少女に怪我の手当をして貰えるという、なんとも「青春だね・・・

」と保健室の窓から見える桜の木大先輩が言ってる様な気がしたが、
気のせいだったわ。

怪我をした理由が“美人”な女教師による“過激”な“暴行”だから
ね。

青春も何もかも夢の如くだからね。

・・・はあ。

「で、何があつたんだよ・・・」

「へ？」

彼女が「何が？」って顔でこちらを見てくる。

「・・・余計なお世話かもしれないけど、何か困ってる事があつたら相談しろよな」

それじゃ、と言って俺は体を起こそうとする、が彼女が電光石火のはやわぎで俺の裾を引っ張り、引き戻そうと俺の裾をぐいぐい自分の所に引っ張るので、俺はバランスを崩し、転倒した。

（10分後）

カタカタカタカタ・・・。

勇美がめっちゃ震えてる。

あの後、俺をこかした勇美は、泣きながら俺に対して謝ってくるので、なんとか宥めようとしたが、どうやら失敗だったらしい。

「もういいって・・・気にすんなよ・・・」

まだ震えている。

「・・・ああ、どうしたものか、と嘆いていると保健室の扉が突然開いた。

「こちらに保健室に入っていった二人組が居たと連絡が入って来たが・・・フィン・・・お前達の事だったんだな・・・」

今度は女剣士の様な奴が入って来た。

・・・つーか、俺が入学して見かけた刀を常時所持してる女だ。

「まあ、一応挨拶はしておこう・・・私の名前は“ヘルズ・マキナ・ブレイブハート”だ」

場が凍りついた。

何言ってるんだこいつ。

「これから仲良くしていつてくれ」

手を差し出される。

まあ、握手するわな。

「あの・・・」

「ん？何だ・・・」

恐る恐る尋ねてみた。

「あの・・・本名とか・・・ないんry」

「“ヘルズ・マキナ・ブレイブハート”だ」

間違えない。こいつは生粋の・・・。

ふと、勇美の方を見してみる。

案の定引いていた。別の意味でカタカタと震えている。

「では、これといって用事も無いので失礼する」

そう言っつて、保健室を出ていった。

「私……この学校で生きていけるんでしょうか……」

「俺だつて……わかんねーよ……」

午前授業が終わるチャイムが鳴った。

第三話〜中二の脅威編Part2〜（前書き）

前の更新よりもだいぶ遅れてしまいました・・・申し訳ございません
んm(´ー´)m

中二の脅威編はもう少しだけ進みます。楽しんで頂けたら幸いです。

第三話〜中二の脅威編 Part 2〜

前回の覚えてるだろうか。

俺が諸事情で怪我をして勇美という美少女に手当てをしてもらい、それを桜の木大先輩が見て微笑んでいる保健室での出来事だ。

そう、あの“中二女”だ。

たしか、“ヘルズ・マキナ・ブレイブハート”と言ったか？
刀を常時所持している女だ。

知らなかったよ。

まさかそんな奴が、

同じクラスだったなんてな。

「・・・」

普段は喋らず真面目に授業を聴いているようだ。

因みに彼女の席は教室を前の扉から入ってすぐ近くだ。

扉からすぐ近くだから席は一番前。

俺と勇美が教室に入った途端「よっ」って言われてちょっとビビった。

そして休み時間。

何を思ったのか、俺は彼女に近づいていた。

「なあ……」

「？」

彼女は首を傾げた。

あまりにもさつきとは違う反応に戸惑う俺。

俺って確かに“よっ”って言われたよな？

お前“よっ”って言ったよな？

「あのさ……なんで俺達が保健室に居るって分かったんだ？誰かに聞いたのか？」

「……かなんだその反応は、と怒りそうになったが、前に女の子を（勇美の事な）何度も泣かしたことがあるので（勇美の事な）黙っておいた（何度も言うけど、勇美の事な）。

「あの……」

「何？」

「……なんの話をしているんですか？」

へ？

いやいや、ちょっと待てよ。

え？嘘だろ、コイツ……。

「二重人格・・・のつもりか？」

「へ？」

「いやなんでもない」

まさかそこまで手が込んでるとは思わなかった。

・・・痛すぎるだろ。

「・・・ちよっと、こようか」

「!？」

「いやいや、そういうのじゃ無いから」

俺自身の評判が悪いのか、さっきの言い回しがそういう風に聞こえたのかは分からないが（きつと後者の方だと思いたい）一瞬、肩を震わせていた。

（5分後）

コイツをやつと教室から連れ出した俺は、ひとまず食堂で話を聞く事にした。食堂の中なら“一般コース”ばかりで気負う事も無いだろう。

これで話を聞く事ができそうだ。

「ここなら大丈夫だろ？」

「?・・・何がですか？」

まだ彼女の心の壁が崩れていないようだ。

こちらも仲間だという事を解らせてみるか。

そう思った俺は机に肘を付き額を手で押さえる（かつてギ〇スに影響された名残）。

これが俺が知っている限りで最高の中二ポーズだ。

「ここならお前を知る者も居ないだろう・・・俺達の事を何故知っていたか・・・話してくれないか？」

「・・・」

何故か彼女に怪訝な顔をされた。

数分前まで自分がしていたことなのに・・・。

「・・・もついいですか？」

「ん、・・・分かった、もついいや・・・」

自分に対して、あくまでも真面目に接する彼女に僕は何も言えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4441o/>

プラス×マイナス

2011年10月8日04時02分発行